

Medical Tribune

2015年3月26日 Vol.48, No.13

株式会社メディカルトリビューン 東京都千代田区九段南1-10-1 クリア文化会館7F ☎03-6008-6000
〒100-0061 東京都千代田区九段南1-10-1 10F (株)MTB ©Medical Tribune, Inc. 2015

第23回末病・エニグマ症例検討会

エニグマ事例の謎解きを考える

疾患の徴候を確実に読み取って、エニグマ事例の謎を解く第23回末病・エニグマ症例検討会(2月6日)では、フロアからも謎解きに参加して活発な討議がなされた今回は、末病医、総合診療医として知っておきたい4症例が報告された。そのうち2症例を紹介する。

■食欲低下と意欲低下に苦しむ 82歳男性

食思不振や意欲低下を訴える高齢者は珍しくない。その解明を試みた東京大学病院老年病科の七尾道子氏は、意外な原因に突き当たった。

患者は元大学教授の82歳の男性。高血圧の既往があり、50歳から服薬を続けている。約1年の経過で食事や仕事に対する意欲の低下、不眠が徐々に増悪し、直近3カ月弱では1日1本の栄養補助食品しか口にできなくなり、10kgもの体重減少が見られた。既往歴は直腸がん手術(65歳時)、腰部脊柱管狭窄症手術(75歳時)、膀胱がん内視鏡手術(79歳時)。身長167.1cm、体重49.1kg、BMI 17.6、バイタル、身体所見に異常所見は認められず、麻痺、筋力低下、知覚低下なし。心電図所見に異常はなく、胸部X線所見では胸腺の肥厚と石灰化



(博慈会老人病研究所提供)

が認められた。高齢者総合評価(CGA)では軽度の認知機能の低下と抑うつ傾向が見られた。また、アレルギーはなく、降圧薬に加えて消化酵素複合薬、整腸薬、睡眠導入薬などの処方を受けていた。

LOH症候群を疑い テストステロン投与

消化管内視鏡検査やCT所見で食思不振を来す器質的異常は検出されず、一定年齢以上の男性、体重減少、意欲低下、不眠などから加齢男性性腺機能低下(late onset hypogonadism: LOH)症候群が疑われた。AMSスコア(Heinemann's aging male symptoms score: 自記式の男性更年期障害チェックシートで50点以上は重度異常を示唆)は70点と高く、ホルモン検査でも遊離テストステロン1.1pg/mL(8.5pg/mL以下で低値)と男性ホルモン欠乏が際立った。一方、黄体化ホルモン(LH)と卵胞刺激ホルモン(FSH)はともに高値で、中枢性の低ゴナドトロピン性性腺機能低下症の可能性は否定された。

このため、3週ごとにテストステロン製剤を投与したところ、食思不振や意欲低下などの症状が徐々に軽減し、70点だったAMSスコアは1カ月後で59点、3カ月後に50点まで低下し、49kgだった体重も1年後には57kgに、2年後には60kgにまで回復した。認知機能や抑うつ状態も改善し、入院時は倦怠感が強く、車椅子を必要としたが、現在は1人で歩行でき、配偶者の介護も可能という。

七尾氏は「女性の更年期障害とは違い、男性のLOH症候群の発症時期は個人差が大きい。また、症状が老年症候群と類似する点に留意し、高齢男性でこの疾患を鑑別に加える配慮が望まれる」と注意を促した。

■息切れが生じて難聴がある 糖尿病の54歳女性

地域医療機能推進機構(JCHO)群馬中央病院内科医長の田嶋久美子氏が報告した症例は54歳女性で身長150.2cm、体重28kgと痩身。31歳で糖尿病を発症しインスリン治療を導入、2年後に難聴が出現した。44歳時の検査ではインスリンの分泌が血中Cペプチド(CPR)0.5ng/mLまで低下、心エコー所見で心筋の肥厚が認められたが、左室駆出率は50%程度であった。

10年後、軽度の労作での息切れと食欲の低下を主訴に同院受診。下肢の浮腫が著明で、体重も36.3kgに増加していた。胸部X線所見上、胸水と心拡大が、心エコー検査では左心腔の拡大および壁運動のびまん性の低下と心筋の肥厚(左室駆出率16%、心室中隔壁厚12.4mm、左室後壁厚19.1mm)が見られたことから心不全と診断、入院となった。

ミトコンドリア糖尿病の可能性を考え 遺伝子検査

入院時、心不全の重症度を示すマーカー、B型ナトリウム利尿ペプチド(BNP)は2,902.0pg/mL以上と高値で、乳酸24.4mg/dLと上昇し、抗GAD抗体は陰性、尿中CPR 7.0μg/日と低下していた。心不全症状は、利尿薬とドパミン(DOA)の持続的な点滴によって消失したものの、これまでの経過、および母親、姉とも痩身に難聴

を思い、母親は61歳、姉は54歳で心不全で死亡したことから、田嶋氏はミトコンドリア糖尿病を疑った。

ミトコンドリア糖尿病は、ミトコンドリアの機能異常に伴う系統的な変性疾患で、糖尿病と感音性難聴を初発症状とし、心筋症、脳筋症などが合併する。また、母系遺伝の形式を取り、30歳代で発症のピークに達する。変異を持っていても、中には発症しないケースもある。そこで、本人と家族の承諾の下にミトコンドリア遺伝子検査を実施し、3243(A-G)塩基点での変異が明らかになった。患者は3週間の加療の後に退院、以後は利尿薬とβブロッカーの内服および混合型インスリン注射の1日3回投与でコントロールを続けている。

同氏は「ミトコンドリア糖尿病はミトコンドリア遺伝子3243(A-G)変異によるものが最も多く、日本では糖尿病全体の1%を占める。若年性の感音性難聴を合併する糖尿病患者では、ミトコンドリア糖尿病の可能性を疑うべき」とし、「心筋症などの合併症を注意深く観察する必要がある」と述べた。

現場の臨場感あふれる参加者 と真剣勝負の症例検討会

博慈会老人病研究所長・福生吉裕氏のコメント

一見どこにでもありそうな症例でも、目の付け方によっては、はっとするようなエニグマ事例として輝きを増すことに驚かされた。研修医および総合診療医の腕を磨くには、もってこいの登竜門となり、またベテランの開業医も楽しめる検討会であったといえる。